

遠絡統合療法 基礎医学セミナー

6 まとめ

●なぜ遠絡統合医学は、原因不明の症状や難治性症状に適用できる治療法なのか？

①ラインの流れは生体の現象と密接な関係があるから

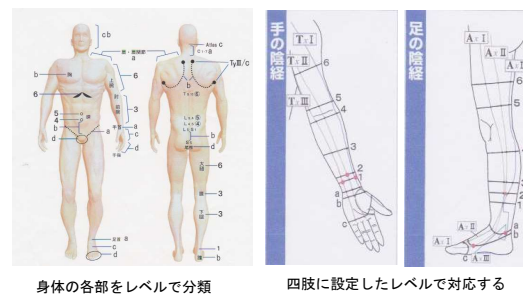
②ライン同士の関係を調節する確実な理論をもっているため

遠絡統合療法で始めに行うこと

①疼痛ラインの見極め



身体の対応からみたレベル



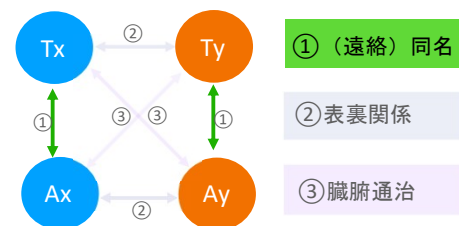
次に行うこと

②治療方針と治療ラインの選定

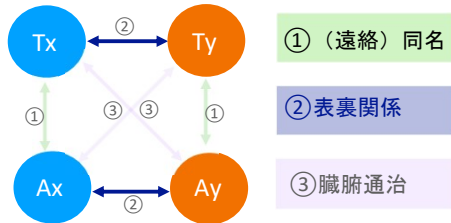
6つの治療方法から行うものを選ぶ

- | | | |
|----------|---|-----------|
| (1) 接続 | ▶ | 流れの再建 |
| (2) 相克 | ▶ | 頑固な障害物の破壊 |
| (3) 相輔 | ▶ | 流れの拡張 |
| (4) 補強 | ▶ | 流れの補強 |
| (5) 増流処置 | ▶ | 流量を増やす |
| (6) 牽引瀉法 | ▶ | 流速を速める |

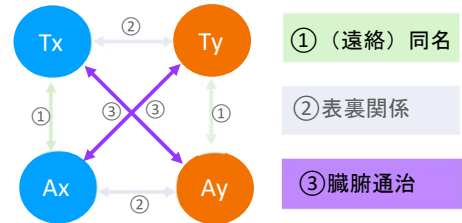
遠絡関係平面図



遠絡関係平面図



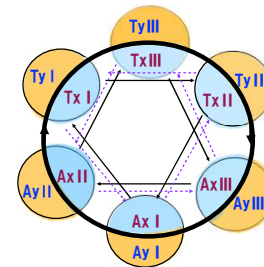
遠絡関係平面図



接続の変換

	TA変換	xy変換	ライン変換
同名 (陽経のTA変換)	T→A	—	—
	A→T	—	—
遠絡同名 (陰経のTA変換)	T→A	—	I Ⅲ II
	A→T	—	I Ⅲ II
表裏 (陰陽の変換)	—	x→y y→x	—
臓腑通治 (TA変換) (陰陽変換)	T↔A	y→x	I Ⅲ II
		x→y	I Ⅲ II

相 克



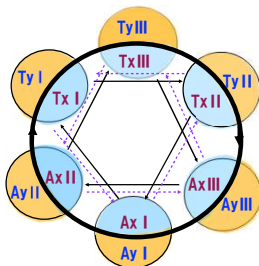
目的：頑固な痛みをとる

方法：

時計回りで疼痛ラインの2つ先の陰経
C-pointを押しながらF-pointに補法

※遠絡六行図の関係で治療ラインを選択する

相 輔

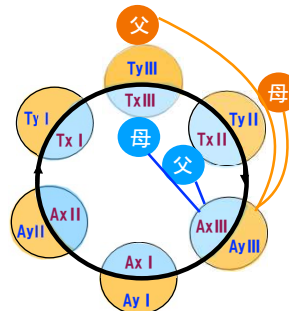


目的：
フローの幅・深さを拡張する

方法：
時計回りで疼痛ラインの1つ先の陰経
C-pointを押しながらF-pointに補法

※遠絡六行図の関係で治療ラインを選択する

補 強



	母	父
陽経	1つ隣	2つ隣
陰経	2つ隣	1つ隣

反時計回りで見ると

母→父の順に
陰経のF-pointを補

相生関係 六行図から母父の関係を見る

増流処置

	母	父
陽経	1つ隣	2つ隣
陰経	2つ隣	1つ隣

反時計回りで見る

母父の陽経、
F-point「6」を瀉

相生関係 六行図から母父の関係を見る

牽引瀉法

接続の本経治療の変法

フローの方向

末梢方向に瀉法することで流速を速めて滞りを解消する

陽経の走行で鋭角に曲がっている部位が滞りやすい点

同側対側の法則

*疼痛ラインに対する治療ラインの関係

	陰(x)		陽(y)
T手	Tx I	対側	Ty I 対側
	Tx II		Ty II
	Tx III 同側		Ty III
A足	Ax I	対側	Ay I 同側
	Ax II		Ay II
	Ax III		Ay III

同側対側の法則

左右どちらの治療ラインを使うか決める法則

疼痛ラインを基準とする

治療ライン：陽経(y)	原則	疼痛ラインと同側
	例外	Ty Iは対側
治療ライン：陰経(x)	原則	疼痛ラインと対側
	例外	Tx IIIは同側

治療点

「遠絡統合療法の治療点」と「経穴」の違い

経穴 治療点の位置で治療対象が決まっている

遠絡統合療法 同じ治療点でも治療対象や治療目的によって意味や使い方が変わる

治療点には異なる2つの役割がある

C-point 陰陽のラインをつなぐ点

F-point 患部と対応する点

C-pointの活用

- (1) 接続 疼痛ラインと治療ラインの陰陽が異なる時にC-pointが必要
- (2) 相輔・相克 C-ポイントは常に必要
- (3) 増流処置 疼痛ラインと治療ラインの陰陽が異なる時にC-pointが必要
- (4) 牽引瀉法 治療ラインは陽経を使うので疼痛ラインが陰経の時はC-pointが必要

C-point

- ラインIIの手足陰陽経すべて
(Ay II Ax II Ty II Tx II) ▶ 2
- ラインIとIIIの手足陽経
(Ay I Ay III Ty I Ty III) ▶ 3
- Tx I Tx III ▶ 1
- Ax I ▶ b
- Ax III ▶ a

C-point

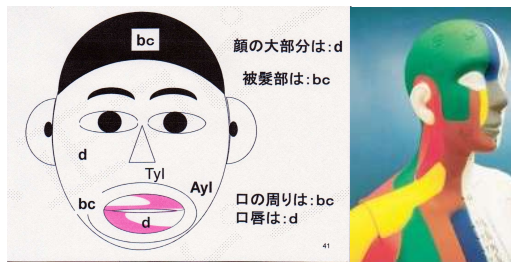
深圧のみを加える

F-point

- 深圧しながら瀉法
(ラインの逆方向に約30回)
- 深圧しながら補法
(ラインの順方向に約30秒)

※回数・時間は症状や状態によって適宜調整する
※トリプルで行う際の補瀉は、照射の向きを変える

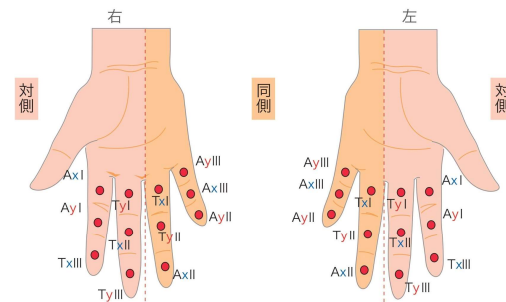
dの対応レベル



各ラインと「d」の位置

術者から見た時のd-pointの配置

図中の●印=押す位置



d-point の使い方と注意点

「指趾・顔の表面・陰部」等の治療で使う
F-point のレベルが「d」の時に使う

- 【例】 右第5趾(足背側)が痛い
rAyIII/d
- 接続(臓腑通治) ▶ lTxI/I:d
- 相輔 ▶ lAxI/b:(d)

局所性症状とは

症状の発生

- (1) 局所性
- (2) 中枢性

治療方針を決める大切な病態の診方



局所症状について

- (1) 外傷などの明確な原因があること
 - (2) 発症初期に局所に炎症所見があること
※炎症の四主徴: 発赤、腫脹、発熱、疼痛
 - (3) 症状の局在が移動しないこと
 - (4) 多くの場合、一側性であること
- ※ 遠隔療法では、局所性症状に該当しない場合は、すべて中枢性症状と考える
- ※ 中枢性症状に対して局所治療を行っても効果はあるが、時間が経過すると症状が戻ることが多い

治療効果を上げるために

- (1) 絶対に治るという意識で治療すること
- (2) 疼痛ラインをしっかりと見極めること
※ 頸部、肩部はラインの判断が特に難しい
- (3) 治療ポイントを正確に押さえること
※ C-point は特に正確に取ること
- (4) 局所性か中枢性か見極めること
※ 中枢性症状に対して局所治療を行っても効果はあるが、時間が経過すると症状が戻ることが多い